

大和川・今池遺跡

発掘資料 その 3

第 4 地区

1979. 3

大和川・今池遺跡調査会

はじめに

この冊子は、発掘調査資料を速報したものである。

大和川・今池遺跡は、大阪府堺市常盤町と松原市天美西町の両市にまたがる広大な遺跡であり、条里制遺構もきわめて明確に残存している。

昭和52年12月、下水処理場計画に伴ない試掘調査を実施した結果、古墳時代を中心とする大遺跡と判明しました。

発掘調査にあたっては、大阪府教育委員会・石神 怡、堺市教育委員会・奥田 豊氏の指導の下に、佛教大学、関西大学、関西外語大学、大阪市立大学、愛泉短期大学の学生諸君の協力を得て、堺市教育委員会・森村健一が担当した。4地区は10,000m²におよぶ調査面積で、調査期間中に雨天が多く調査員の労苦には頭の下がる思いである。又調査には、地元の方々、南部下水道、堺市下水道、松原市下水道の御協力を得た。

この冊子作製は、古園哲朗、十河稔郁、川口宏海、森村が分担して行なった。

位置と環境

この遺跡は、大阪府堺市北東部から松原市北西部にかけての広範囲にわたる遺跡であり今回発掘された4地区はこのうち松原市天美西町に所在する部分である。この地域は、上



発掘調査風景



大和川・今池遺跡及び周辺遺跡

町台地に続く中位洪積台地の東端に位置し、これより東は西除川旧河道の氾濫平野が北方に向って広がっている。

周辺遺跡としては、南に弥生時代の北花田遺跡（中期）・南花田遺跡（中期）があり、古墳時代では上田町遺跡（前期）・今池遺跡（中期）がある。北では弥生時代の住吉第6号地点遺跡（中期）、東では弥生時代の瓜破遺跡（前期～後期）がある。これらの遺跡はすべて上記の中位洪積台地に位置する。また附近一帯は条里制遺構がよく残り、地図上でみると整然とした地割が復元できる。この条里の起点となっているのが、南方で東西一直線に走る古道の長尾街道である。このほか、本遺跡のすぐ西側には古代の人工池であると思われる依羅池がある。

第4地区概要

3地区の東側に位置し、面積10,000m²に及ぶ広い区域である。

東側と西側南半分の区域に集中して浅い落ち込みを202ヶ所、中央部から西側にかけて素掘りの井戸ー17基、桶側井戸ー1基を検出した。西側北端付近における遺構の密度は極めて小さい。また周囲の壁面土層断面を観察の結果、東西、南北にはしる2本の条里制造構の珪断面を確認することができた。

遺物には、古墳時代の土器片にまじり、弥生時代の石鎚・壺片、また管玉などもみられた。

落ち込み群

いずれも古墳時代の遺構と考えられるが、その性格は不明である。

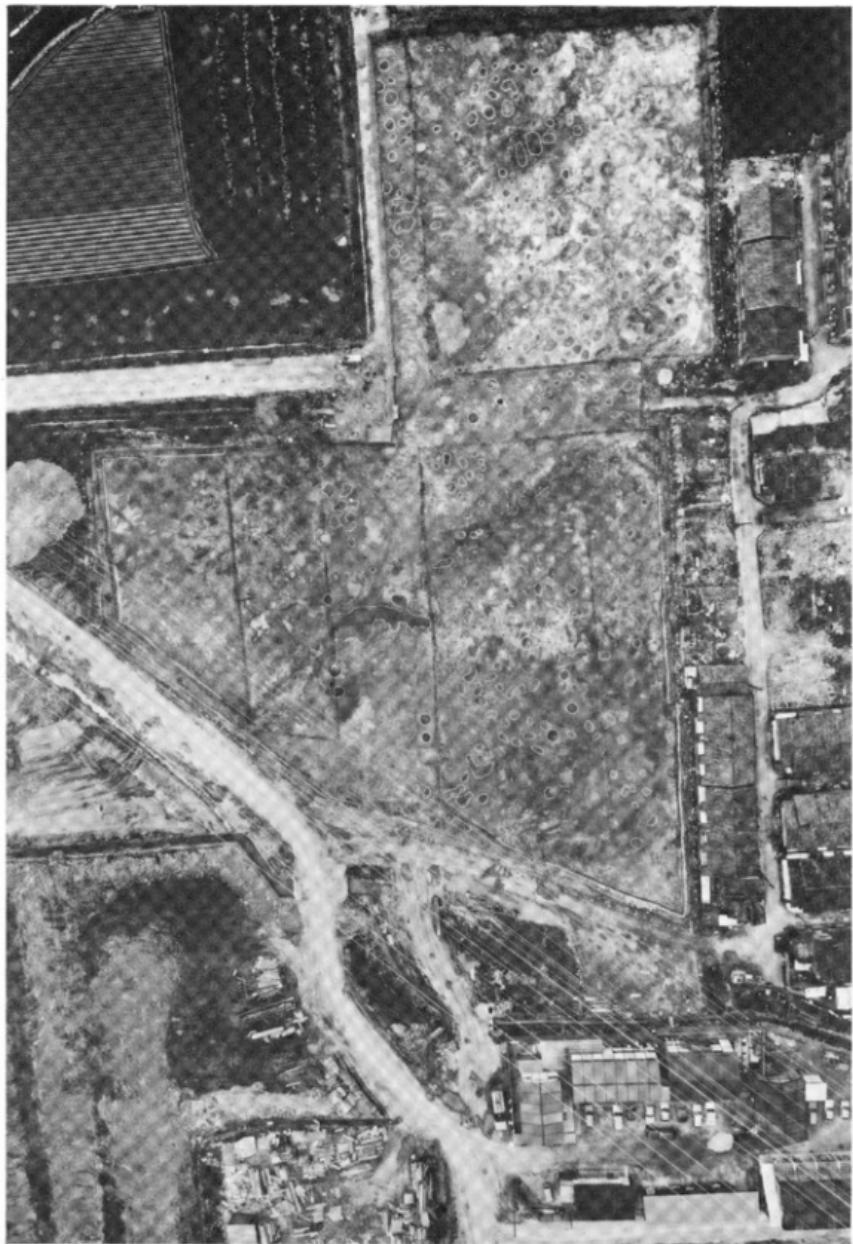
形は円形、楕円形、方形をはじめ不定形のものが多い。落ち込みの規模も様々で、径1~2mを計る例が多く、小さいもので0.4~0.5m、長軸で3~4mを測る大きいものもあるが、深さはほとんどが15cm前後で平らな底になる。埋土は明確な堆積層として判別できるのは非常に少なく、黒褐色、灰白色の粘質土と地山（明黄褐色粘質土）が混入した状態の土層断面がよくみられた。そのため落ち込みの掘り方が明確でないものも少なくはなかった。4地区からの遺物出土量は少なく、また遺物を全く伴出させない落ち込み群の占有を考え合わせると、この地域には整然とした区画をもたない耕作地としての可能性が十分考えられる。

井戸

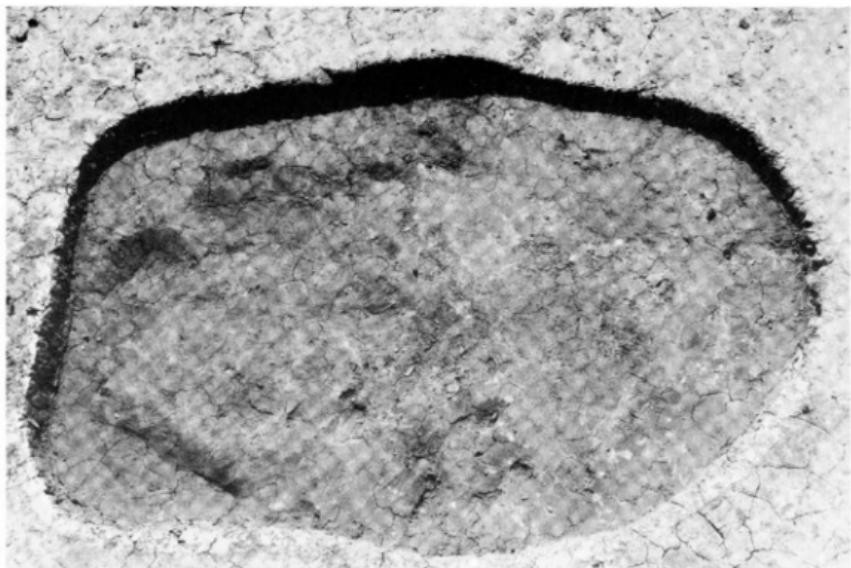
素掘り井戸、桶側井戸を検出しておらず、共に3地区で確認された井戸と同じ構造で時期もほぼ同時期で近世と思われる。

素掘りの井戸はいずれも径約2mの円形で、上面より内側へ傾斜した後、ほぼ垂直に掘り下げている。4地区は粘土層が深く、砂土ないし砂礫層の底まで地表から5~7mほどの深さまで掘り下げており、3地区的井戸より約2m深い。4m前後の深さから大量の湧水が得られた。P-122の上層からは、長さ9cmで両端に2つの穿孔を有する木製品が出土しており、おそらく繩を通したもので井戸から水をくみ上げるつるべの1部に用いられたのではないかと思われる。

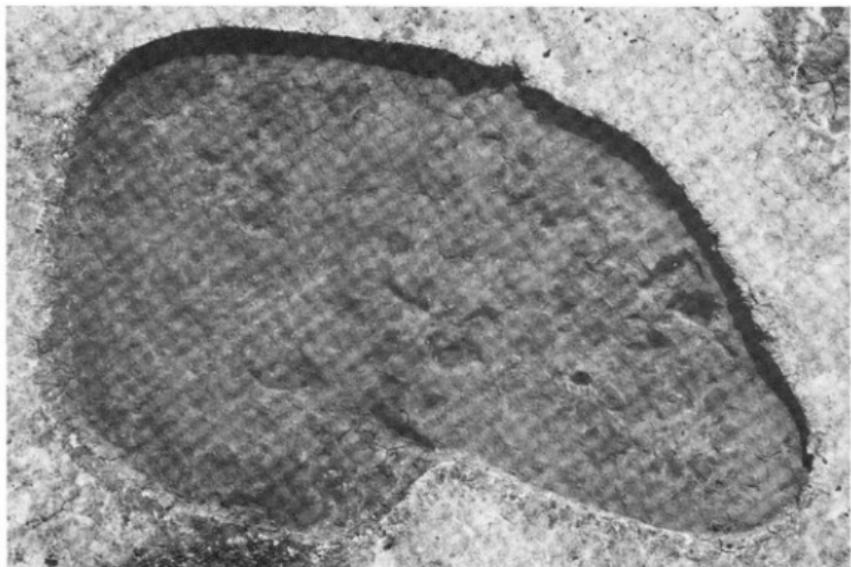
桶側井戸は、6段の桶組と瓦積みをほぼ完全な形で検出することができ、3地区的桶側井戸の復元形を示唆するなど重要な資料といえる。



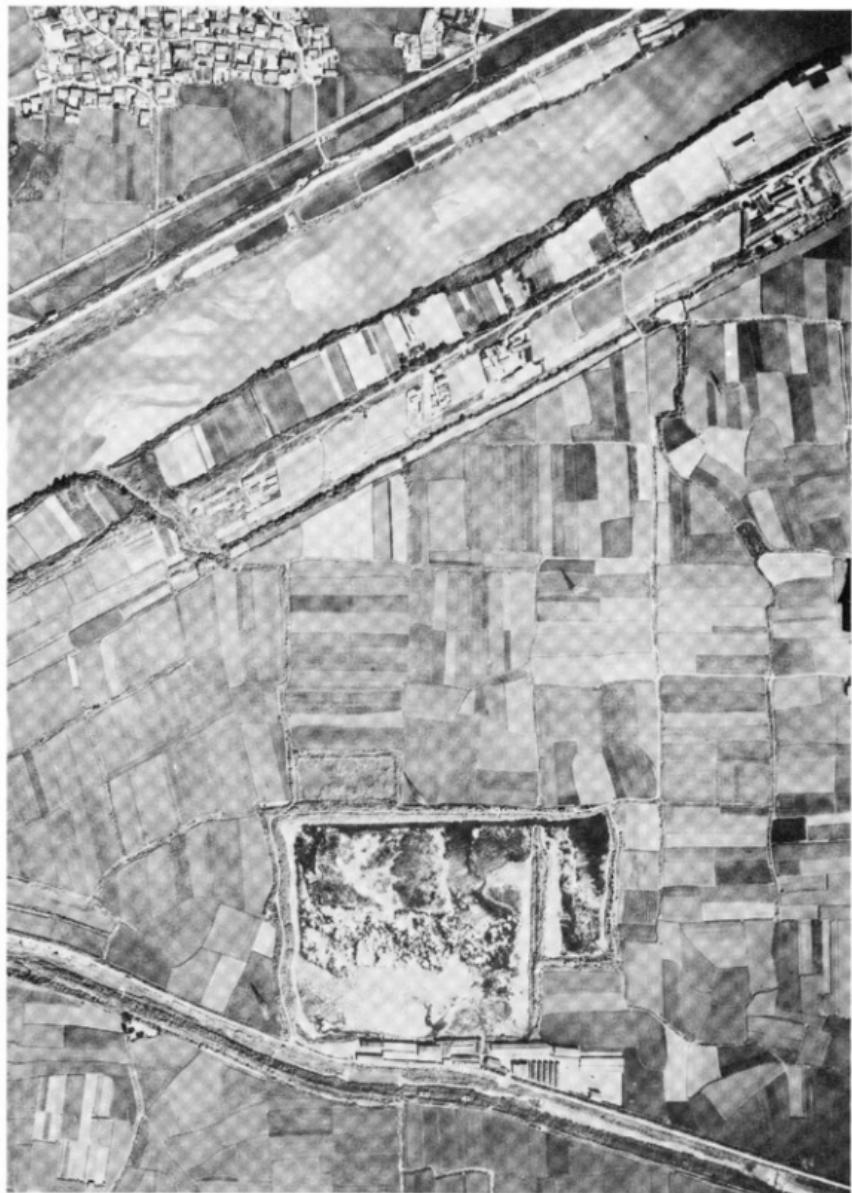
4 地区航空写真



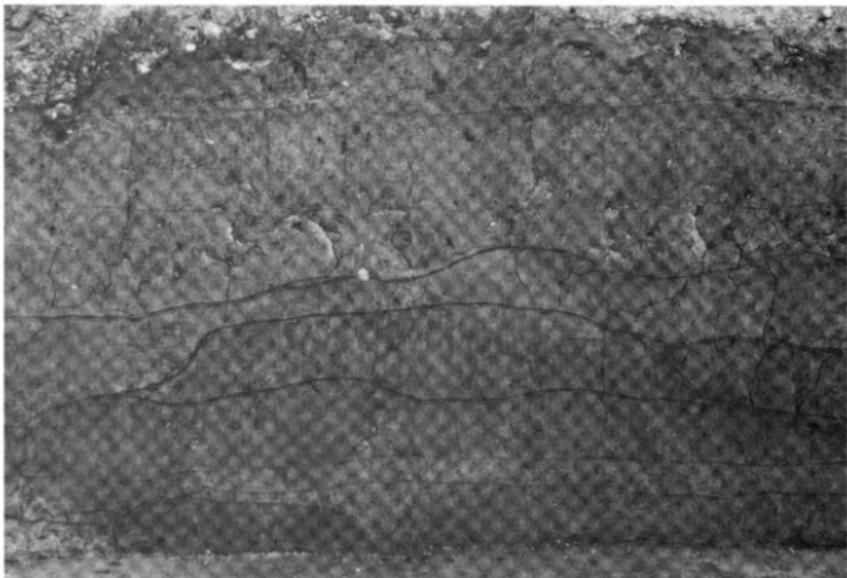
不明ピット、P-54



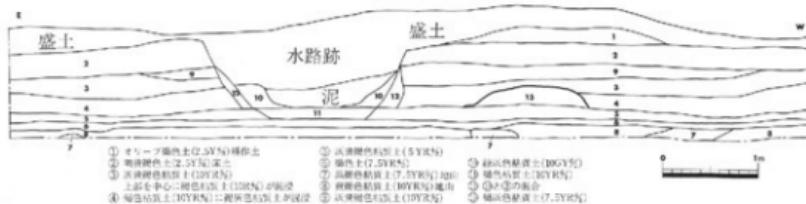
不明ピット、P-56



旧地形航空写真



セクション3、条里制遺構土層断面



同 実測図

条里制遺構

条里制の遺構は畦の土層断面として確認した。4地区周囲の壁面、セクション1・5(東壁)、6(西壁)、2・4(北壁)、3(南壁)の6ヶ所で、現存する畦畔のほぼ直下に包含層の中位よりやや下方で検出できた。セクション1・5・6は東西に、セクション2・3・4は南北にはしる条里の断面で、両者の延長は直交する。畦の規模は均一ではなかつたが、高さ0.2~0.3m、幅1.2~2mの計測範囲で残存していた。

桶側井戸 (P-188)

地表面からは砂土層まで、7m程掘り下げた井戸であるが、上端に瓦を積みめぐらして、その下に桶を6段積み重ねた施設をもつたもので、3地区の桶側井戸と同じ構造である。

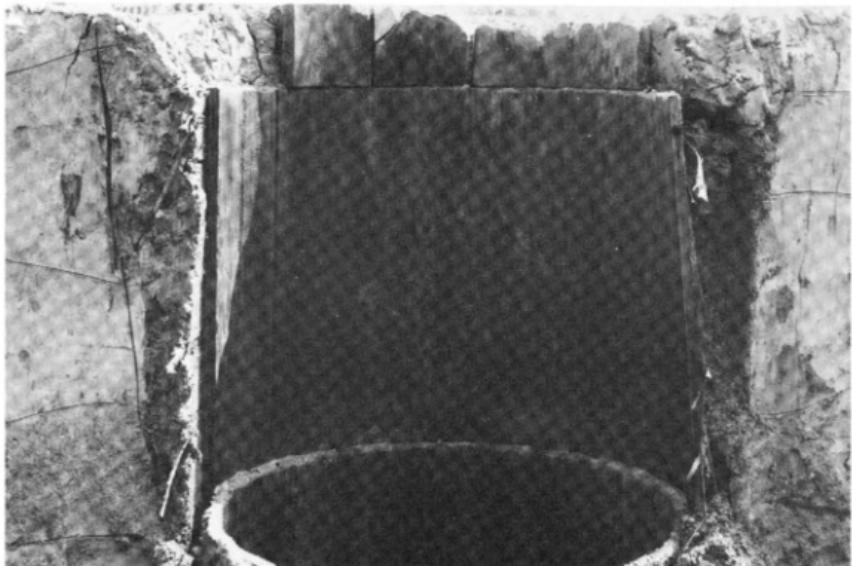
各段の桶の構造は変らず、長さ約97cm、厚3cm前後の板を円形に寄せ合わせ、下方へ八の字形に広がった形をしている。板の幅は上端で10~15cmを計るが、下端幅には上端より広いものと狭い板があり、下端幅の狭い板を2~3枚組み入れて桶の形を調整させている。板の枚数は1段目-24枚、2~4段目-25枚、5・6段目-27枚と異なるが、各桶とも上端径約105cm、下端径115cmほどであり差はない。桶の外側には1~3cm幅の竹を4本寄り合わせたがを、2段近接させて上方と下方に回している。

板はいずれも上端の内・外側と下端の内側の角をカットされており、特に上端部外側は板を寄せ合せた状態で接合部の角を2枚同時にカットしてあるがこれはたがのはめこみを、また下端内面のカットは桶の積み重ねを容易にする工夫かと思われる。湧水を吸収するための切り込みを施した板は底の桶へ向うほど多くみられる。

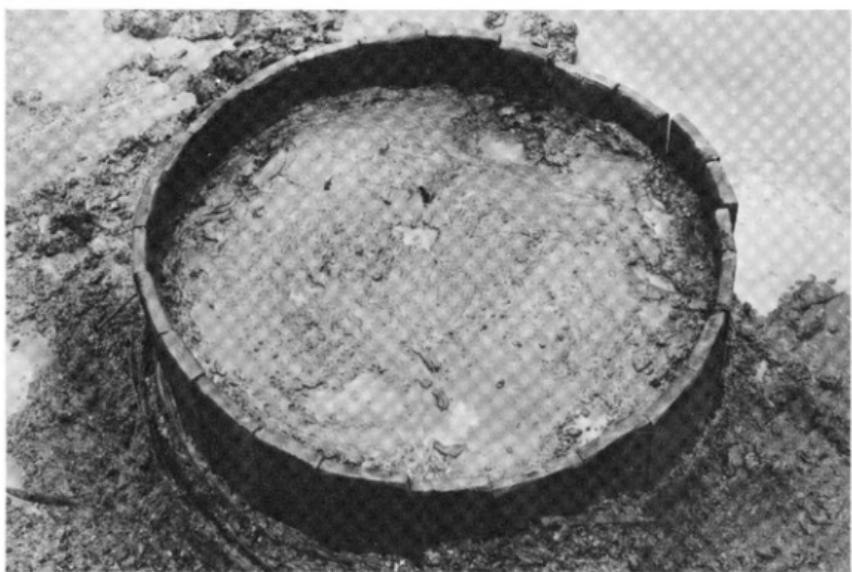
6段の桶は上段の桶を下段の桶の最上段に巻いてあるたがの上に置くようにして、約10cm重ねて積まれてあり、全長5.4mを測る。最下段の桶の板は下端部を両面から長さ10cm程鋭くカットされ、上5段ほど下方への広がりはなく底の土中に打ち込んだ状態であった。また井戸内からは多量の瓦が出土しており、瓦積みは一段ではなく本来の上面近くまで数段積まれていたようである。



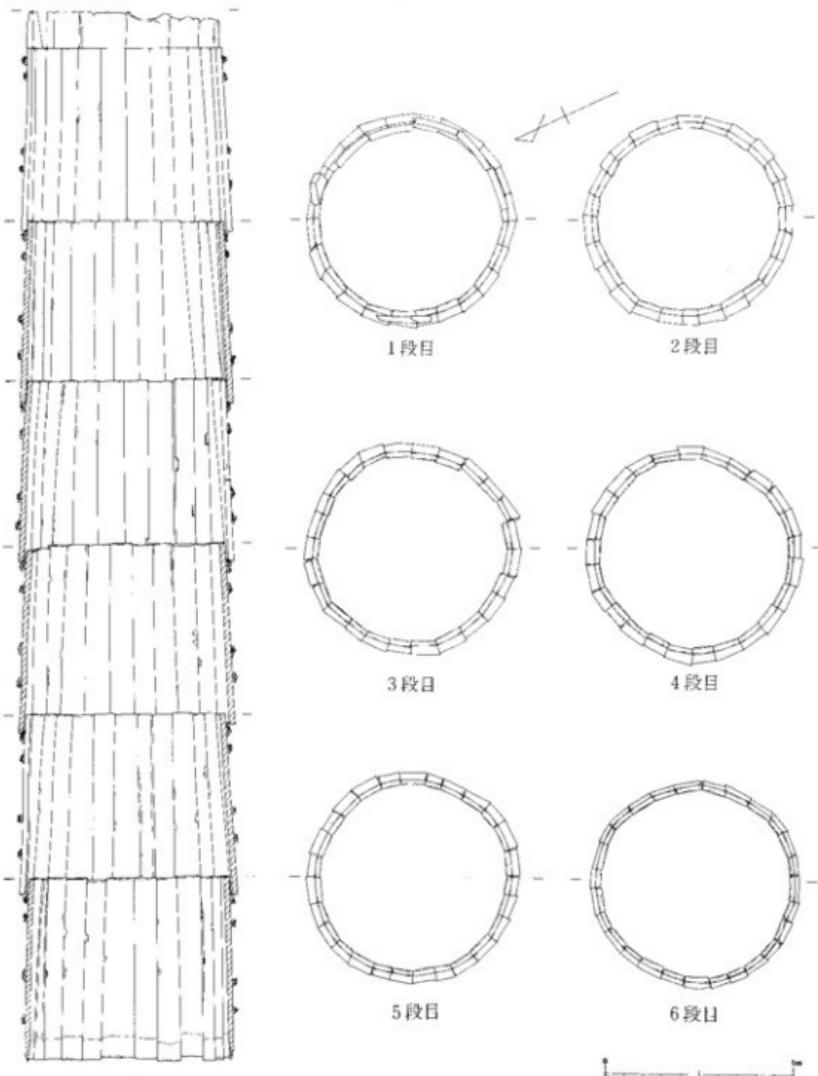
桶側井戸 1段目側面



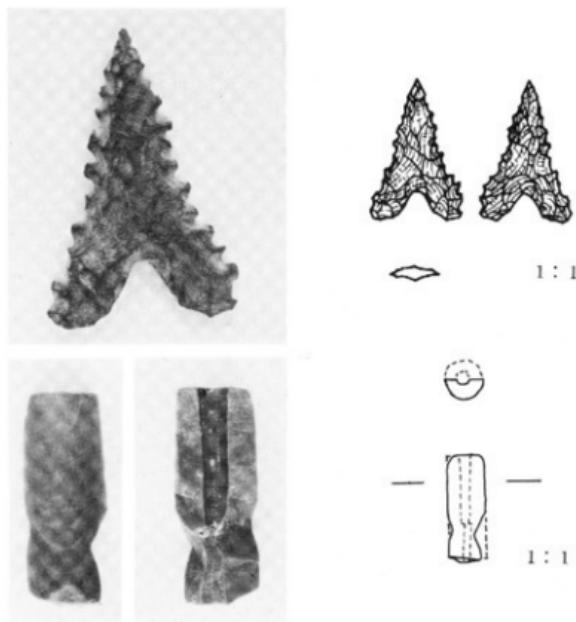
桶側井戸 1段目断面



桶川井戸 4段目



桶側井戸 桶実測図



出土遺物

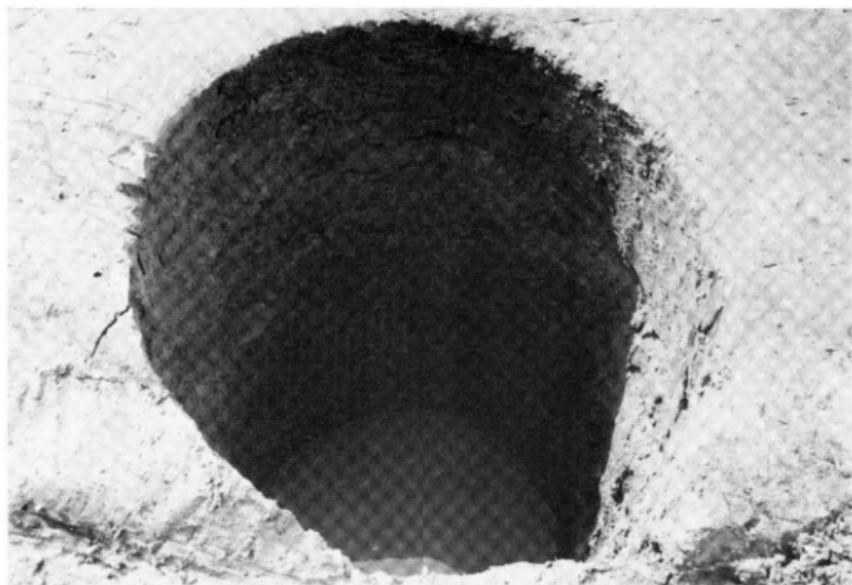
4地区から出土する遺物は非常に少なく、遺構に伴なう遺物の検出もない。セクション4・5にまたがる一画を土器サンプリングしたところ数は少ないが、上層(灰褐色粘質土)から瓦器、瓦片、中層(褐色粘質土、灰黄褐色粘質土)から下層(にぶい黄褐色微砂粒土、黒褐色粘質土)にかけては須恵器、土師器片とともに、下層からは弥生時代の壺(底部)片管玉も出土した。

石鎌

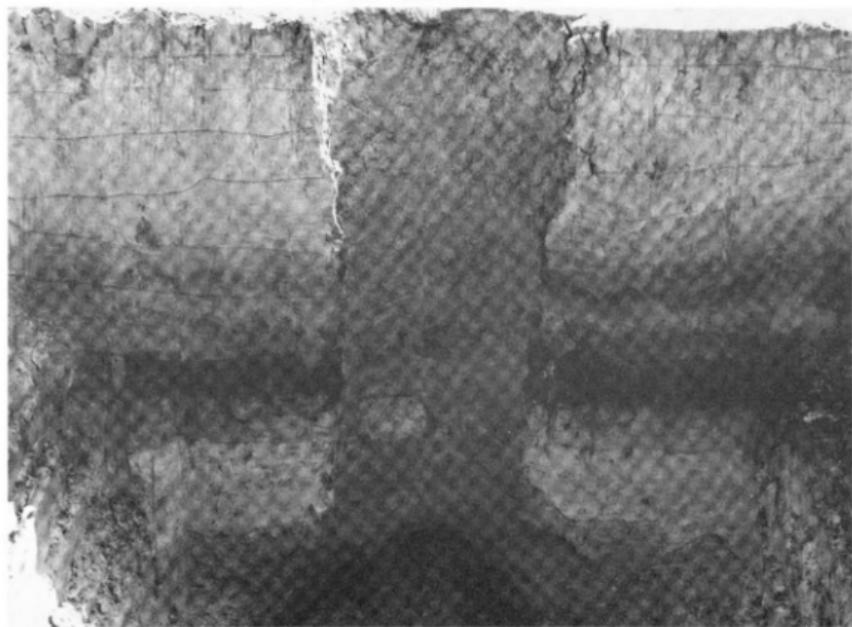
試掘の際に黒褐色粘質土から出土。弥生時代に属する凹基式の石鎌で、長さ2.5cm、最大幅1.6cm、厚0.3cmを測る。身部は二等辺三角形を呈し、側辺は細かく剥離して鋸歯状に調整されている。

管玉

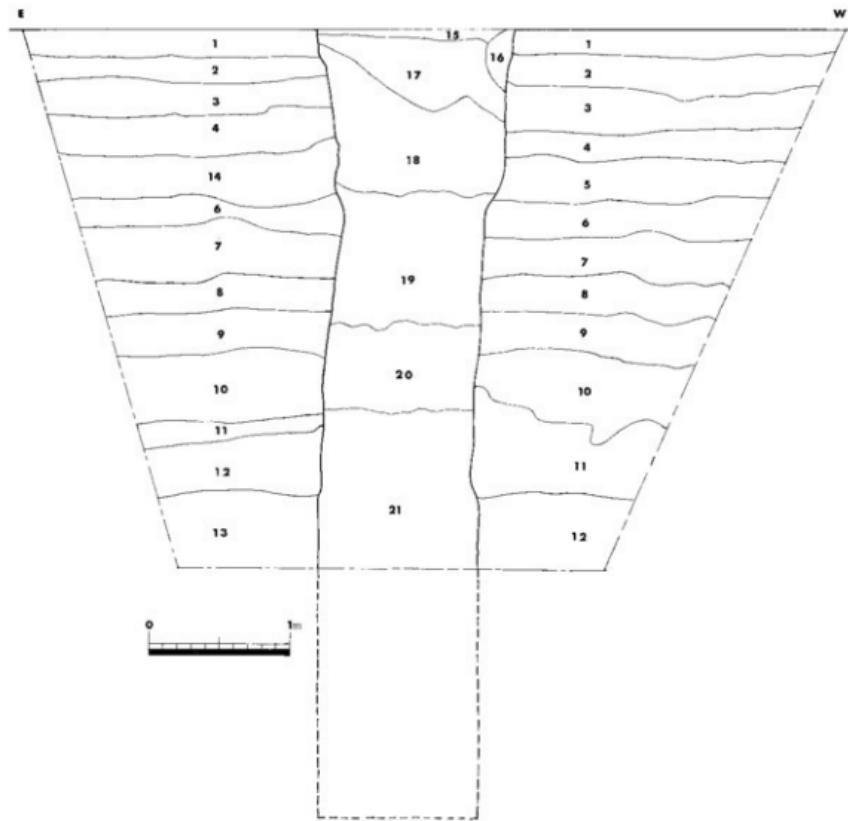
地山直上から出土したもので、下方からの穿孔時に破損している。碧玉製で、長さ1.4cm、径0.7cmを計る。出土地点には近接して古墳時代のピットがあるが、また直上からは弥生時代の土器片も出土しており、いずれの時期かは不明である。



P-155 (素掘り井戸) 平面



同 断面



- ① 明黄色粘質土(10YR%)と灰褐色粘質土(10YR%)の混合
- ② 灰褐色粘質土(2.5Y%)に褐色粘質土(10YR%)がまじる。
- ③ 緑灰色粘質土(5G%)に浅黄粘質土(2.5Y%)がまじり後者の割合が大きくなる。
- ④ ③と同じであるが前者の割合が大きい。
- ⑤ 灰色粘質土(5Y%)
- ⑥ 黒褐色粘質土(10YR%)に灰褐色粘質土(10YR%)がまじる。
- ⑦ 緑灰色粘質土(5G%)に灰褐色粘質土(10YR%)がまじる。
- ⑧ 黑褐色粘質土(10YR%)に黒褐色粘質土(10YR%)がまじる。
- ⑨ 灰褐色粘質土(2.5Y%)
- ⑩ 緑灰色粘質土(5G%)
- ⑪ 緑灰色砂礫土(5G%)
- ⑫ 青灰色砂礫土(10BG%)
- ⑬ オリーブ紫色砂礫土(7.5Y%)
- ⑭ オリーブ灰色粘質土(2.5GY%)
- ⑮ 浅黄色(2.5Y%)・青灰色土(5BG%)混合
- ⑯ 褐褐色粘質土(5YR%)
- ⑰ 青灰色粘質土(5BG%)砂質まじり
- ⑱ 布綠灰色粘質土(10G%)
- ⑲ 緑灰色土(7.5GV)粘質まじり
- ⑳ 緑灰色砂礫土(7.5GY%)
- ㉑ 暗青灰色砂礫土(5BG%)

P-155 (素掘り井戸) 断面図

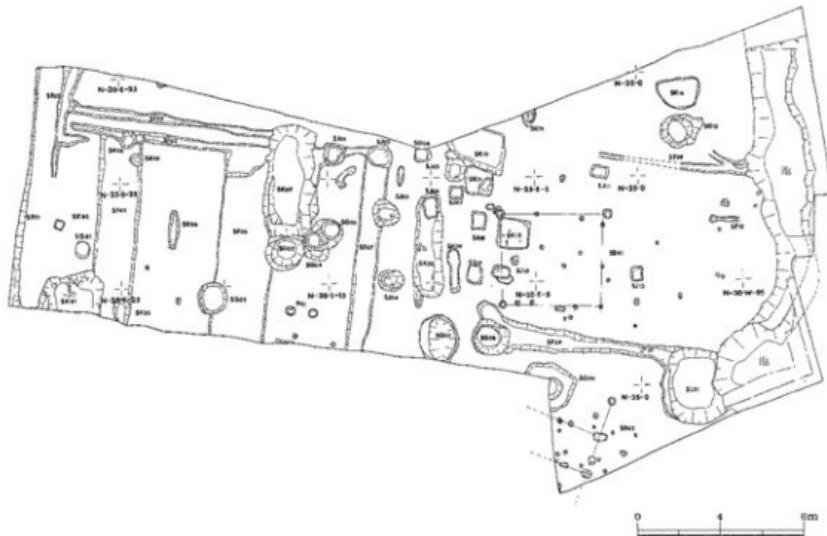
まとめ

短期間の発掘調査期間ではあったが、不明ピット約200ヶ所、井戸18基、条里制造構を検出し十分な成果を得ることができました。

不明ピットはおそらく、西側の少し高い住居跡に住んだ人々をささえた古墳時代の耕作

地であろう。近世の耕作時に使用した井戸は、地表から5～7m下に井戸底がみられ、砂土層が深いことを物語っている。中でもP-188の桶側井戸は注目に値する。さらに、現存する条里制造構と当時の造構との関係を調べた結果、当時の畦畔は明確なもので高さ0.2～0.3m、巾1.2m程を測り、現存する畦の直下に存在したが、排水溝はみられなかった。

今のところ発掘調査は、処理場計画の数%にすぎず、古市・百舌鳥古墳群の中間地点として、生産・生活両面において重視していく必要がある。



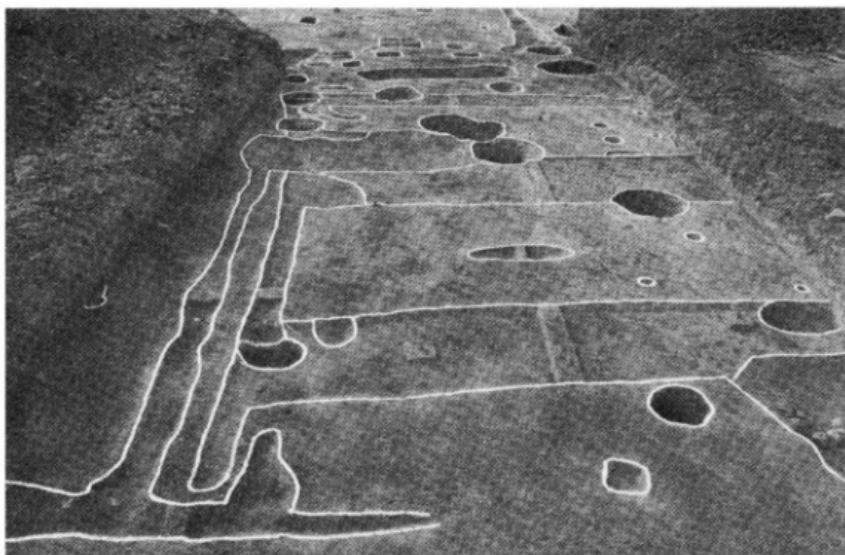
遺構全体図（「新金岡町所在遺跡発掘調査抄録」より抜粋）

周辺遺跡紹介その②～堺市新金岡町所在遺跡

新金岡町遺跡は、その発掘調査が行なわれるまでは遺構の存在すら知られていなかったものであるが、昭和52年10月の1ヶ月間の調査で13世紀後半から14世紀にかけての遺物を出土するとともに、調査区域のほぼ全面にわたって墓坑・井戸等の遺構が確認されている。

墓坑は円形のものと方形のものがあり、円形が4ヶ所、方形が8ヶ所であった。各墓坑からは羽釜あるいは甕を用いた火葬骨の納骨用器とその蓋とした瓦などが出土した。しか

しそれらの納骨器からは人骨が全く認められなかったものの、奈良県興福寺より出土した瓦と類似した瓦（平安時代末）が出土したことから、興福寺と寄進関係をもちこの遺跡付近に住んでいた和田氏の墓地と考えられる。この仮定をうらづける資料として青磁・白磁の出土と、火葬という一般民衆とは異なる葬制を行っていることがあげられる。とくに、青磁・白磁が13世紀末から14世紀のものであることから、中世の墓地であろうと考えられている。



遺構写真（「新金岡町所在遺跡発掘調査抄報」より抜粋）

